

第一章 コンテ・ヴェルデ号

コンテ・ヴェルデ号

一九二二年一〇月二二日、スコットランド・ダルムイエのウイリアム・ビアードモア社造船所で、一隻の船が進水した。イタリアのロイド・サバウド社が発注した一万八千トンの新型客船、コンテ・ヴェルデ号である。

イタリア語で「緑の伯爵」を意味するコンテ・ヴェルデ (Conte Verde) とは、一四世紀にイタリア北部を支配したサヴォイア伯・アメーデオ六世 (Amadeus VI、一三三四〜一三八三) の別名である。彼は緑色の服装を好み、時々、従者にも緑色の服を着せたことから、この名で呼ばれた。¹

アメーデオ六世を生んだサヴォイア家は、一九世紀に入りイタリア全土の支配者となる。一九〇九年六月、サヴォイア家はロイド・サバウド社を設立し、大西洋定期客船の運航に進出した。第一次世界大戦後、イギリスやフランスなど客船先進国に伍して、同社は二隻の姉妹船の建造に乗り出す。一九二一年二月一〇日、まず姉分のコンテ・ロッソ号 (Conte Rosso 一八、五〇〇総トン) が進水し、二〇カ月後に妹分のコンテ・ヴェルデ号が進水した。竣工時の諸元は、

一八、七六一総トン、全長一八〇・一メートル、幅二二・六メートル、航海速度は一八・五ノットとなっている。規模・速度とも、ルシタニア号（一九〇六年進水、三一、五五〇総トン、二五ノット）や、タイタニック号（一九一一年進水、四六、三二八総トン、二三ノット）などの戦前優秀船に及ばないが、船体強度の強化、通信機を備えた救命艇の装備により、安全性は格段に向上した。それより何よりも人々を驚かせたのは、船内インテリアの華麗さであった。

エントランス・ホール、食堂、喫煙室、音楽室など、公室 (Public room) と呼ばれる船内の共用スペースは、非常に広壮で、十二分の天井高が確保されていた。これらの公室は、高級木材、彫刻、絵画、ステンドグラスで飾られ、その装飾・調度のみで四〇万ドル以上の費用が投じられている。²

一等船室の定員は四五〇名、二等船室は二〇〇名、三等船室は一七八〇名であり、これに加えて船員四〇〇名が乗り組んだ。船内は一〇階建てとなっており、各階の構成は次のようになっている。

一階	ボイラー室、タービン機関室
二階	燃料庫、荷物室
三階	三等船室、船員室、機関整備室、燃料庫
四階	一等船室、二等船室、三等船室、冷蔵庫
五階	一等船室、二等船室、二等理髪室、三等食堂、船員室
六階	一等船室 (特別室)、一等下階食堂、一等理髪室、一等浴室、二等エントランス・ホール、二等プロムナード、二等船室、

二等浴室，船員室

七階 一等エントランス・ホール，一等プロムナード，一等船室，

一等上階食堂，一等音楽室，一等図書室，二等プロムナード，二等喫煙室

八階 一等船室，一等喫煙室，一等船室，ベランダ・カフェ，二等プロムナード，二等ホール，救命艇デッキ

九階 高級船員室，高級船員食堂，船員洗濯室，厨房，救命艇デッキ

一〇階 操舵室，無線室

乗客は，コンテ・ヴェルデ号からどのような印象を受けただろうか。ここに，ジェノヴァ港から乗船する一等船客の様子を再現してみたい。

港の係員に荷物を預けた後，鋼鉄の舷に横付けされた長いタラップを昇る。六階のハッチを指して昇るうち，高い所が苦手な人ならば，一〇数メートル下にある海面に足がすくむだろう。やや息を切らして扉をくぐると，突然足元の感触が和らぐ。広く明るいエントランス・ホールの床一面に，厚い絨毯が敷かれている。潮の匂いに代わり，花と石鹼液の芳香が漂う。壁は重厚な色調だが，暗さを感じさせない。鏡のように磨かれたオーク材やマホガニー材で仕上げられている。ホール中央には，繊細な彫刻を施した黄金色のドアがある。これがエレベーター

のドアであると気付くまでに，少し時間がかかるかもしれない。

エレベーターの向かいには広い階段がある。船室は階段の横の廊下を少し進んだところにある。階段脇で足を止め，天井を仰ぐ。遙か上方のステンドグラスで覆われた天窓から，ホールに七色の光が降り注ぐ。中央壁面には，彫刻で囲まれた大きな絵画がある。中世の城郭の広場に集まる甲冑の騎馬団。その中央に緑の装束の武将がいる。サヴォイア伯・アメーデオ六世，

緑のコンテ・ヴェルデ伯爵である。城壁の向こうには，イタリア・フランス国境に広がるサヴォイアの山地が見える。

コンテ・ヴェルデは卓抜した兵術で北部イタリアの領土を拡大し，この地域の商業を活性化させた。彼はまた，たびたび騎馬試合を催し，礼節を尽して参加者をもてなした。その歓待の場で，彼は常に緑の装束をまとった。

そう言えば，中世イギリスの物語「ガウエイン卿と緑の騎士」では，緑の騎士がガウエイン卿を歓待し，騎士道の奥儀を伝授している。あるいはコンテ・ヴェルデが緑の騎士のモデルであったかもしれない。

船室へ続く狭い廊下の前で立ち止まったので，他の客に迷惑をかけたようだ。奥へ進もう。乗船前に渡された案内図を頼りに，廊下を進み，右に曲がる。廊下はさらに狭くなり，突き当たりに窓がある。中ほどまで進み，船室の扉を見つけ，中に入る。

特別室「キャビン・デラックス」。船内に十二室だけ設けられた最高級船室である。室内の壁も廊下と同じ木材で仕上げられている。部屋の両側に大きな二つの寝台が据えられ、その傍らに化粧テーブルが置かれている。右手の寝台に歩み寄って腰掛け、窓から船外を見る。これまで見たことのない、海の上から見下ろすジェノヴァ港。タグボートや小型貨物船が漂う海面の前方に、コンテ・ヴェルデ号の姉妹船、コンテ・ロッソ号の右舷がそびえている。

白と黒に塗り分けられた船体、頂部にマホガニー材で装飾されたブリッジ。プロムナードの流れるような窓列はエリプティカル・スターン（楕円形船尾）まで続く。二本のオレンジ色のファンネル（煙突）には、白帯と二本の青線。ロイド・サバウド社のフラッグ・シップは、ジェノヴァの暗い空のもとで、どこか物憂げに見える。

部屋に目を戻す。中央には執筆記、その上にガラスの花瓶が置かれ、花が生けられている。机の左側にドアがある。ノブに手をかけるが回らない。鍵が掛かっている。多分、家族連れの客が、二部屋続きで使うときに開けるのだろう。執筆記の傍らには安楽椅子、向かいにワードローブ。これらの調度のテクスチュアは、部屋の壁と少し異なる。アフリカ産のクルミ材かもしれない。左手奥に化粧室。広い大理石の浴室、大きなバスタブ、トイレ、洗面台とガラス製化粧品ラック。洗面台の二つの蛇口をひねると、片方から冷水、他方から温水が出る。手を洗

い、ラックのコップに水を汲み、少し喉を潤す。部屋に戻って、安楽椅子に身を沈める――。

少し眠っていたようだ。部屋は薄暗い。立ち上がって窓の外を見る。既に船は港を出て、空も暗くなっている。入り口の脇のスイッチを入れ、照明を点ける。明るく眩しい。時計を見ると、もう夕食の始まる時刻である。ワードローブの鏡の前に立ち、身なりを整える。

廊下に出ると、やはり電灯が灯っている。裸電球ではなく、洒落なガラス製の覆いがついた照明だ。やや広い廊下に出たところで右に曲がり、突き当りまで進む。緻密な彫刻が施された入口扉を開けて一等食堂に入る。

何という広さだろう。向こう壁の窓がかすんで見えるほどだ。円形テーブル、正方形テーブルに四人から六人が掛けている。これまでの船内食堂のような、長テーブルに窮屈に並ぶ様とはまったく異なる。陸上のレストランと変わらない、贅沢なスペースの使い方である。

船員に座席を尋ねる。――御席は上階にございます――。一等食堂は上階・下階の二層に分かれている。案内書によれば、下階定員は二〇六名、上階は八四名。今いるのは下階食堂である。私の席は上階だ。案内に従い、テーブルの列を横切って、正面の大階段に向かう。途中、食器が詰まれた台に目をやる。彫刻で覆われた豪華な作りだ。オーク材のようだが、エントランスの材料とは少し質感が違う。スラヴォニア産のようだ。

大階段の壁面にもコンテ・ヴェルデを描いた大きなカンヴァスが掲げられている。階段は中ほどで九〇度曲がり、絵に背を向けて昇る。上階食堂は下階食堂の半分ほどの広さだが、下階以上に余裕をもってテーブルが並べられている。階段の手すりの脇の二人がけのテーブルに案内される。周囲の六人がけのテーブルに比べ、よほど小ぶりだが、他のテーブルと同じく美しい花が飾られている。

給仕が挨拶をしてワインが注ぐ。

カルロ・ガンチア。

ガンチア・ワイン最高のヴァインテージだ。

スープが運ばれる。

ブヴァルティーンのポタージュ。

続く前菜。

クヴァーナー産アネハヅル。

ヒシとニューブルグソースのタンバル。

クレオールとパトナ米。

その洒脱な盛り付け。

そしてロイド・サバウド社章の入った美しい皿。

主菜が運ばれる。

子羊のオープン焼き。

冷やしたアスパラガスを添えて。

ソースは甘め。メニューには「ロヴィニ・ソース」とある。シェフのオリジナルだ。

このテーブルからは、食堂全体を見渡すことができる。その上、スタンドグラスで飾られた吹き抜けを、間近で眺めることもできる。食堂の壁全体に沿って、深く彫り上げられた天使像が配されている。この室内意匠は、一六世紀頃の華美な装飾、ルネサンス建築の中でも後期の様式を意識しているようだ。

続いてもう一皿。

ピアーヴェ・チーズで挟んだキジのロースト。

傍らにベーコン、レタスのサラダ、チップ。

その味、香り、色、形、すべてが芸術だ。

階段の壁画をルイージ・カヴァリエリの絵筆にも比肩する。

デザートが運ばれる。

パティシエが作った一〇数種ものケーキ。

洋ナシムースのカラメルソースを選ぶ。

果物が盛られたバスケットからイチゴを二つ頂く。

食事を終えた乗客が席を立ち、食堂を出ていく。男性客の一

部は、後方の階段横の扉から出て行く。喫煙室に向かうのだから。食堂前方中央の扉へ向かうのは、隣の音楽室へダンスを楽しむにいく乗客だ。

最後のカフェ・モカを飲み終えて席を立ち、音楽室へ向かう人々に続く。

一等音楽室の両開きの扉をくぐると、黄金色の光に包まれる。吹き抜けの天井の中央に、陸上のホテルでさえ目にするこのできない壮麗なシャンデリアが吊るされ、その光は金箔を施した柱と壁面の精緻な彫刻を照らし、大理石の床に反射している。絨毯の上を進み、窓際のソファに座る。ソファの傍らに置かれた百合の花から芳香が漂う。

入口を振り返ると、一瞬、扉が消えたかのような錯覚を感じる。扉の周囲一面がガラス窓に覆われ、音楽室全体を写しているのだ。今この鏡には、オーケストラに合わせてキャッスルウォークを踊る一〇組ほどの男女が映っている。彼らは時折ガラス窓に目をやり、自分のステップの正確さを確認している。ラグタイムが奏でられる部屋の上方には、古代ギリシア人の群舞を描いた長大な絵画が掲げられている。幾千年の時を超えて、踊る人々の心が一つになったかのようなのである。

コンテ・ヴェルデ号の船内装飾は、タイタニック号など第一次大戦前の客船のそれを遙かに凌いだ。先行して進水した姉妹船コンテ・ロツソ号に比べても豪華さは増し、さながら洋上に現れた宮殿

であった。白い船体の上に載るブリッジは高価なマホガニー材で建造され、外観上の大きな特徴となった。

船体・機関・配電設備は、ほぼすべてが英国製であった。鋼製船体、二軸のスクリュー、二基のタービン、蒸気を供給する八基のボイラーは、いずれもウイリアム・ビアードモア自社製である。各スクリューの出力は一一、〇〇〇軸馬力、毎分九二回転である。³ボイラーは重油用であるが、石炭焚きにも対応しており、重油と石炭の価格次第で転用可能であった。タービン、操舵システムは極めて高い精度で製作されており、試験航行の成績は抜群であった。⁴

航行設備も極めて高精度のものが採用された。すなわち、スペリール・ジャイロ社製のジャイロコンパス、ホワイト・トーマス社製の方位磁針、チャドバートンズ社製の機関監視テレグラフ、マクガフ社製の表示システムなどである。

食堂の料理ための肉類、ワイン、その他食材を貯蔵のため、ホル式炭酸冷却装置により駆動される三七〇立方メートルの冷蔵庫が装備された。厨房・配膳設備はグラスゴアのジョン・フィリップス社が製作し、蒸気洗濯設備はクライドバンクのD&J・トゥリス社のもので採用した。

一等上階食堂には一一四個、下階食堂には一六〇個の照明が設置された。音楽室には二二八個、エントランス・ホールには一二四個、喫煙室には二〇〇個が設けられ、船内照明の総計は四〇七四個にのぼる。この大量の照明をはじめ、船内の各種電気設備へは、一一〇ボルト一五〇kWのタービン発電機三基から、環状主回路を通じて

配電された。この環状主回路は海軍仕様ものであり、商船としては世界で始めて採用された。主回路に用いられた断面一二・九平方センチメートルの絶縁ケーブルも、当時の商船中、最大の断面積を持つものであった。⁵

コンテ・ヴェルデ号の最初の航海は一九二三年四月二一日であり、ジェノヴァからアルゼンチンのブエノスアイレスに向けて出航した。同年六月一三日にはニューヨーク航路にも就航している。ヨーロッパと南北アメリカを往復する裕福な乗客を迎えるため、船内設備は贅を尽したものとなった。特に、フランスに流れがちな観光客を、イタリアに引き寄せることは至上命題であり、一等公室はイタリアの宮殿を模して設計された。⁶かつての貴族が最高の芸術家・建築家を雇ったように、ロイド・サバウド社もまた、コッペデ三兄弟（Gino Coppede 一八六六〜一九二七、Carlo Coppede 一八六八〜一九五六、Aolfo Coppede 一八七一〜一九五二）や、画家ルイージ・カヴァリエリ（Luigi Cavallieri 一八六九〜一九四〇）を雇い、その腕を振るわせた。調度と絵画はすべてイタリアで製作され、ダルムイエまで輸送して、コンテ・ヴェルデ号に据え付けられた。

図書室、エントランス・ホール、音楽室、上階食堂には吹き抜けが設けられ、床から天井までの高さは六メートル以上ある。広大な公室の窓と天井はステンドグラスで覆われた。古典様式を用いながらも、室内には電気照明が多量かつ巧妙に用いられ、調度と装飾が最も効果的に映えるように配置されている。配電設備、電気シャンデリア、照明類もすべてイタリアで制作された。細工鋳物など、船

内用としては異例の仕様を持つ照明器具もある。

一等食堂の意匠は一六世紀の後期ルネサンス様式、一等図書室は一五世紀のトスカーナ・ルネサンス様式、一等音楽室は「帝国様式」と呼ばれる意匠が採用された。こうして一等船客は公室を移動するたびにイタリアの歴史絵巻を見ることになる。その反面、コンテ・ヴェルデ号のインテリアは装飾過剰で一貫性を欠くという指摘もある。詩人ジョン・M・ブリニン（John Malcolm Brinin 一九一六〜一九一九）は、やや苦笑交じりの様子で述べている。

この頃、イタリアに登場したジノ、アドルフオ、カルロのコッペデ三兄弟は、おとぎ話のような歴史様式で船内を装飾した。彼らありとあらゆる建築様式・美術様式のかけらをかき集め、手当たり次第にちりばめた。洗練された批評家なら、この大胆不敵でなければいいインテリアを、コッペデ風バロック趣味とでも名付けるだろう。とにかく何もかもがコメデイに見えてしまう代物なのだ。⁷

リソルジメント——イタリア解放運動

元来、ルネサンスとバロックは相対立する時代背景で生まれた様式である。一四世紀イタリアで興ったルネサンスは、一五世紀に入

り建築様式にも影響を及ぼした。ルネサンス建築は、直線、円、球などを基礎とした造形が追求され、概して静謐な雰囲気を持つものが多い。

一六世紀、戦争や経済的停滞によってルネサンスは終息する。宗教改革の脅威に直面したカトリックは、対抗改革に着手するが、ガリレオ (Galileo Galilei 一五六四〜一六四二) への迫害に代表される異端審問は苛烈を極めた。一七世紀に入ると、過度に厳格化した改革への反省も生まれ、教会の魅力を増すために生まれたのがバロック建築である。教会を訪れる信者達の視覚に訴えるため、バロック建築は、楕円、らせん、その他変則的な図形を多用し、過剰なまでの装飾が施された。⁸

一面において、コッペデ兄弟は様式の一貫性など構わず、乗客の嗜好に迎合して様々な意匠を船に詰め込んだと言える。結果として、個々の公室は正統なルネサンス様式であっても、船内全体としては新種のバロック装飾のように見えたであろう。

イタリアにおいては、前衛芸術運動である未来派が、早くも第一次世界大戦前から活動を始めている。一九二〇年代にはアールデコやモダニズムが造形世界を席卷し始めた。一九二七年に竣工したフランスのイル・ド・フランス号 (Ile de France、四三、一五三総トン) の船内はアールデコで固められていた。代表的なモダニズム建築であるドイツ・デッサウのバウハウス校舎が竣工したのはその前年である。当時の前衛芸術家・建築家達にとって、ルネサンスやバロックの如きは化石も同然であった。前衛デザインが客船インテリアに

適用されるまでに多少の期間が必要であることを考慮しても、コンテ・ヴェルデ号の装飾が守旧的であったことは否めない。

しかし他面において、コンテ・ヴェルデ号の船内を飾るイタリア史のエピソードは、単にナシヨナリズムや英雄主義のみではなく、リソルジメント(イタリア統一運動)の自由主義をも象徴していた。一六世紀の対抗改革以降、イタリアは次第に衰退し、スペイン、オーストリア、フランスなどに蚕食されていった。イタリア北西部で比較的強い勢力を維持していたサヴォイア公国も、一七九六年のナポレオン (Napoleon Bonaparte 一七六九〜一八二二) の侵攻に屈服する。領土の多くを失ったサヴォイア家は拠点をサルデーニャ島に移し、国名もサルデーニャ王国に改めた。

一八一四年、オーストリア、イギリス、フランス、プロイセン、ローマ教皇国、ロシアによるウィーン会議の決定に基づき、サルデーニャ王国は旧サヴォイア公国の領土を回復し、ジェノヴァも獲得する。しかし新たに構築されたウィーン体制は極めて保守的・抑圧的であり、ヨーロッパ各地で強い不満を生んだ。一八二一年、サルデーニャ王国でピエモンテ蜂起が起こるが、失敗に終る。一八三〇年、フランス七月革命に呼応して、再びイタリアで蜂起が起こるが、間もなくオーストリア軍に鎮圧される。この頃からリソルジメントのシンボルとして、緑白赤の三色旗が用いられ始める。緑はイタリアの大地、白はアルプスの雪、赤は統一運動において流された血と解釈されることが多い。

翌三一年、カリニャーノ公カルロ・アルベルト (Carlo Alberto 一七九八〜一八四九) がサルデーニャ王国の七代目国王として即位する。アルベルトは、自由主義憲法を制定して封建的制度や国内関税障壁を撤廃すると共に、科学・芸術の振興策を進めた。一八四八年、フランスで労働者を主体とした二月革命が起き、翌三月にはヨーロッパ全土へ波及する。統一運動勢力から絶大な支持を得たアルベルトは、オーストリアに宣戦する。自由主義の盟主アルベルトの声望はヨーロッパ全土に轟き、オーストリアは勿論、より急進的な改革を目指す共産主義者にさえ脅威となった。アルベルトに支持者を奪われまいと、エンゲルス (Friedrich Engels 一八二〇〜一八九五) は「新ライン新聞 (Neue Rheinische Zeitung No. 73, August 12, 1848)」紙上で呼びかけた。

しかし、国内の王侯のなかでイタリアの自由にはむかう主たる敵は、カルロ・アルベルトであったし、いまでもそうである。イタリア人は、「神よ、われらをわれらの友から守りたまえ、われらの敵はわれらみずから守るべし！」という格言を時々刻々くりかえし、守らなければならない。彼らはブルボン家のフェルディナンドをほとんどおそれるにあたらぬ。彼はとつくの昔に仮面をはがれたのである。これに反して、カルロ・アルベルトは、自分のことを“la spada d'Italia” (イタリアの剣) としていたるところでほめたたえさせ、イタリアの自由と独立のもっとも確実な保障となる剣をふるう英雄として、ほめあげさせて

いる。⁹

しかし翌四九年、アルベルトはヨハン・ラデツキー (一七六六〜一八五八) 率いるオーストリア軍に、ノヴァーラの戦いで敗北する。アルベルトはポルトガルに亡命し、四カ月後に死亡した。一八五九年、サルデーニャ王国はフランスと同盟を結んで、再びオーストリアに宣戦する。ラデツキーを失った後のオーストリア軍は敗退を重ね、イタリア北部・中部から放逐される。リソルジメントの伝説的英雄ジュゼッペ・ガリバルディ (一八〇七〜一八八七) は義勇軍を率いてイタリア南部を奪った。ガリバルディは占領地をヴィットーリオ・エマヌエーレ二世 (アルベルトの息子・一八二〇〜一八七八) に無償で献上し、一八六一年にイタリアは統一を果たす。

一九二〇年台に建造されたロイド・サバウド社の三隻の客船、^{赤の伯爵}コンテ・ロツソ号、^{緑の伯爵}コンテ・ヴェルデ号、^{白の手}コンテ・ビアンカマノ号 (Conte Biancamano 一九二五年竣工、二三、五六二総トン) は三色旗の色そのものであり、まさにリソルジメントの象徴であった。抑圧からの解放と自由を求めたリソルジメントの闘士達の姿が、船内公室に描かれたコンテ・ヴェルデに重ねられていることは疑いない。ただし史実としてのコンテ・ヴェルデは、イタリア辺境の一支配者に過ぎなかった。当時の先進文化の影響は受けたにしても、ルネ

サンスにおいて中核的な役割を演じた人物とは言い難い。一四世紀イギリスで書かれた物語「ガウエイン卿と緑の騎士」のモデルがコンテ・ヴェルデであると推測したのはダルデンである。¹⁰この物語に現われる緑の騎士は、騎士道精神の伝導者である半面、首を切り落とされても死なず、皮膚も血液も緑色の不気味な存在として描かれている。ダルデンの推測が正しいかは別として、一四世紀ヨーロッパにおけるコンテ・ヴェルデ像は、ルネサンス的洗練と中世的陰惨が混濁しているように見える。ロイド・サバウド社がサヴォイア家の祖先を実態以上に美化したことも否定できないであろう。

統一後のイタリアは、リソルジメント以来の領土拡張指向を修正できず、一八八九年にはエチオピアを、一九一一年にリビアを侵略する。第一次世界大戦では戦勝国となったものの、六五万の戦死者を出し、期待していたフィウーメ(Fiume, 現クロアチア領リエカ市)も獲得できず、国民の不満を高めた。戦後のイタリアは経済的苦境と社会不安に苛まれた。国内では争議や暴動が頻発し、多くの移民が新天地を求めて南北アメリカに渡った。コンテ・ヴェルデ号の三等船室も、これらの移民でひしめいていた。こうした近代イタリアの歩みは、同時期の日本を思い起こさせる。欧米列強の接近にともなう幕末の騒乱、明治維新、日清戦争以降の対外侵略、日露戦争講和への不満による日比谷焼打事件、富国強兵と表裏一体の農村の困窮、南北アメリカへの移民等々、十九世紀半ばから二〇世紀初頭の日本は、多くの点においてイタリアと共通している。

とは言え、いかにイタリアがヨーロッパの後進国であったと言っても、その文化的影響力は日本の比ではなかった。

また両国の政治状況にも大きな相違があった。日露戦争後の日本は国際協通路線を維持し、内政もそれほど反動的ではなかった。この基調は第一次大戦後も続き、一九二〇年台には社会主義の全盛期を出現させる。一方のイタリアは、第一次大戦終後数年にしてムッソリーニが政権の座についた。イタリアにも社会党(一八九二年にイタリア労働者党として結成、一八九五年改名)や、共産党(一九二一年結成)などの強力な左翼政党は存在し、事実、第一次大戦終結から二年程度は勢力拡大を続けた。統一以来イタリアを支配してきた自由主義政府はこの事態に対処できず、革命を恐れた中産階級、資本家、軍、地主、農民はファシスト党の支持に回った。

ファシズムとイタリア移民

一九二二年一〇月、ファシスト党員がローマに進軍すると、国王はベニート・ムッソリーニ(一八八三〜一九四五)の政権奪取を受け入れる。こうしてイタリアは極右の道を歩むことになるが、これは一九二〇年台全般を通じて左傾化していた他の欧米諸国や日本と様相を異にしている。

ただし、首相就任直後のムッソリーニはまだ全能ではなく、一九

二六年にファシスト党以外の全ての政党が解散させられるまで、しばらくは自由主義者や社会主義者の抵抗が続いた。当時のイタリア社会の緊張は、そのままコンテ・ヴェルデ号の船内にも持ち込まれた。前に述べた通り、コンテ・ヴェルデ号にはイタリアから南米へ向かう移民が多数乗船した。主として三等船室を利用した彼らの様子はどうであつたらうか。

一等船客が八階の音楽室でボールルーム・ダンスを始めた頃、五階船尾の三等食堂では夕食が続いていた。三等食堂は船首と船尾に一箇所ずつあり、前者の定員は約四五〇名、後者は約一五〇名である。三等船室の定員は約一七八〇名であり、満員時は三交代で夕食を取らなければならない。今回の航海も三等船室は七割がた埋まっており、夕食は三交代制となった。今、二番目のグループの時間が終わろうとしている。三番目のグループは、食堂に通じる階段に並び始めている。階段の列から会話が聞こえる。

「あなたはどちらへ？」

「ブエノスアイレスです、あなたは？」

「私もですよ、向こうに親戚がいるんです。」

「そりゃ心強い、こちらは近親の者がいないからねえ、何かあったら心配で……まあ国にいても同じことですが。」

「お宅もアルゼンチンへいらつしやるの？」

「ええ、親子六人、新たな門出です。」

「六人じゃ船室が狭いでしょう？」

「それが運よく六人部屋が空いてたんですよ。一人一ベッド、ほんとに贅沢ですよ。前の家じゃベッドが二つしかなかったからねえ。子供たちは二段ベッドなんて始めて見るもんだから、はしやぎ回って騒々しいつたら。」

「船首の方には大部屋があるそうですね。」

「ああ、私も聞きましたよ、何百人も詰め込まれてるんだってね。」

「まるで兵舎ですな。」

「飯はいけるそうだよ。さっき食堂から帰った一番目のグループの人らに聞いたんだ。」

「ああ、この船じゃ、まともな物を食わせるらしいね。」

「ブエノスアイレスについた頃には、みんな丸々太っちゃってるんじゃないかな。」

「でも一等食堂の食事はもつとすごいらしい。」

「すごいなんてもんじゃやない、一食だけで、私らが何ヶ月も食えるよ。」

「どうせ戦争で大儲けした奴らが食ってるんだらう。」

二番目のグループが席を立ち、階段を降り始めた。入れ替わって階段に並んでいた三番目のグループが食堂に入り、テーブルについていく。食堂には六人掛けから一〇人掛けの長テーブルと長椅子が多数並んでいる。前のグループのうち、まだ五人ほどの一団が居座っていた。彼らは団体の移民らしく、団長とおぼしき男の話に耳を傾けている。船員が退室を促しているが、粘ってなかなか動こうとしない。団長の男は団員に向かって話を続けている。

「諸君、いま我々はジェノヴァを出てブエノスアイレスに向かう。しかし我らは祖国イタリアを捨てるのではない。イタリアの土地をアルゼンチンに広げるのだ。あの戦争で祖国を辱めた輩に、イタリアの誇りの何たるかを見せようではないか！」

周囲の乗客たちが苛立ち始めた。

「何だあいつらは？」

「ファシスト支持者だな」

「アルゼンチンを占領するのは勝手だが、食堂を占領するのはやめてくれ！」

団長は周囲を見廻し、団員に呼びかける。

「それでは諸君、この集いをジョ^若ヴィネツ^人アの^よ斉唱で締めくくろう。」

団員一同は起立し、団長の指揮に合わせて歌い始めた。

万歳、英雄の人民よ

万歳、永遠なる祖国よ

理想の運命のもとに

息子らは再び生まれ出ずる

食堂の方々から怒号が上がった。

「やめる！」

「その歌を聴くと胸くそが悪くなる！」

「ファツシヨ野郎ども、とっとと失せろ！」

一団は歌い続ける。

戦士の勇気が

先達の徳が

ダンテの洞察が

いま汝らの胸に輝く

ジヨ^若ヴェ^人ネツ^よツア、ジヨ^若ヴェ^人ネツ^よツア

美の春よ

人生の苦難にありて

汝らの歌声は響きこだまする

ベニート・ムツソリーニのために

エヤ^万・エヤ[！]・アラ^万・アラ[！]

我が美しき祖国のために

エヤ^万・エヤ[！]・アラ^万・アラ[！]

周囲の乗客の中に、大声で別の歌を歌い始める者が現れた。

前進せよ、人民よ、そして団結せよ

バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^よサ

前進せよ、人民よ、そして団結せよ

バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^よサ

次第に他の乗客たちも呼応して歌い始める。

バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^よサ、勝利に向けて

バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^よサ、勝利の旗よ

さらに船員達も加わり、バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^旗サの大合唱と
なった。

自由の社会主義よ、永遠なれ

搾取に喘ぐ人民よ

高く掲げよ赤き旗

抑圧されしプロレタリアよ

バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^よサ、勝利に向けて

バン^赤デイ^旗エー^よラ・ロツ^よサ、勝利の旗よ

ファシスト団員もひるまず歌い続ける。

イタリア人民の誇りもち

忠誠を誓え、ムツソリーニに

もはや貧しき街はなく

階級の憎しみは消え

不逞のバンデイエ^旗ラも消えゆく

ファシズムの救いに輝かん

食堂が騒然とする中、厨房脇の扉から高級船員を先頭にした一団が駆け込んできた。後に続く船員達が食堂の各所に散り、大声で呼びかける。

「静粛に！」

「皆、静かにするんだ！船長が来られたぞ！」

「諸君、静粛に！」

しかし怒声や口論は收拾する気配を見せない。高級船員達は少し話し合い、他の船員達に何かを命じた。その後、船長を含む十数名の船員がファシスト支持の団体を取り囲んだ。船員が団員に向かって叫ぶ。

「我々について移動するんだ！これは命令だ！乗組員が諸君を護衛する！さあ行くぞ！」

「階段に向かって進むんだ！早く！」

左右から罵詈雑言が浴びせられる中、船長と団員達は船員に守られながら階段に向かった。団員全員が階段に消えると、喧騒は次第に収まり、ざわめきに変わった。乗客たちは食堂中央に残っている数名の高級船員を見つめた。その中の一人が一歩進み出た。

「諸君、私は副船長リヴァローラだ。コンテ・ヴェルデ号は政治集会の場ではない。諸君がどの党を支持しようと、コンテ・ヴェルデ号は諸君を運ぶ。諸君がどの党を支持しようと、規則と命令には従ってもらう。以後、この船で政党歌を歌うことを禁止する。再びこのような騒ぎを起こした者は、ナポリ港で下船してもらう。船を降りたいものはいるか？」

副船長は目で左右を見廻した。食堂は静まり返った。

「よろしい。では食事を始めたまえ。」

厨房の助手や船員が、床に落ちた食器を拾いはじめた。乗客もそれを手伝った。そしてようやく彼らの夕食が始まった。

一九二〇年代半ば、毎年十万単位のイタリア移民がアメリカ合衆国、ブラジル、アルゼンチンなどを目指した。シップビルディング・アンド・シッピング・レコード誌 (Shipbuilding and Sipping Record)

に掲載されているコンテ・ヴェルデ号の図面には「三等船室」という表記は使われず、移民室 (Emigrants)、移民食堂 (Emigrants Dining Room) という表記が用いられている。¹ コンテ・ヴェルデ号は設計当初から一等、二等以外のスペースを移民輸送に充てる計画で建造されたのである。

コンテ・ヴェルデ号で、ファシスト党を支持する移民と社会党支持者との間に衝突が起きたのは、一九二六年四月初旬のことであった。前者はファシスト党歌「ジョヴェネツァ (Giovinezza)」で、

後者は「バンディエーラ・ロッサ (Bandiera Rossa)」で氣勢を上げた。

船長がファシスト党支持者を船首に移動させたため、騒動は一応収束した。^{1,2} この事件はジェノヴァの警察を通じてムッソリーニ内閣にも伝えられている。プロミネンティ・ドゥチニ (Prominenti Duci) の論文では、冒頭でこの事件に触れているだけであり、騒動が船内のどこで起きたか、ファシスト党支持者が何人いたかなどは不明である。

一等用の船室・公室に比べ、三等スペースは極めて質素であった。三等船室には、二人部屋、四人部屋、六人部屋、それに数百人分が一同に寝る大部屋があり、これらに備えられたベッドはすべて二段式であった。最高級船室「キャビン・デラックス」の面積は、三等四人部屋のほぼ五室分、三等大部屋の約四〇ベッド分に相当し、甚だしい格差が窺える。三等船客が集団で会することができるのは、

船首・船尾の二ヶ所の食堂か、船首甲板のみであった。三等大部屋も広い面積を持っていたが、大量の二段ベッドが視界を遮っていた。船首甲板もそれほど広くはない上、貨物ハッチや揚重機器が所狭しと並んでいた。このような理由から、三等船客が団体で集まることのできる場所は食堂に限られた。イタリア本国で困窮していた移民の中には、こうした設備でも満足する者がいたかもしれない。しかし、貧相な船室閉じ込められて惨めな思いをする者も当然多かつたであろう。

ジョゼフィン・ベーカーとコンテ・ヴェルデ号

貧しい移民をすし詰めにした三等船室、軍艦仕様の機関室、その上にのしかかる金満の一等公室——それがコンテ・ヴェルデ号であり、当時の一般的な豪華客船の姿であった。一等音楽室で繰り広げられたイタリア上流社会の舞踏会は、滅びを前にしたポンペイの饗宴のようにも見える（事実、姉妹船コンテ・ロッソ号の一等音楽室はポンペイ遺跡の様式を踏襲していた）。

勿論、そのように見えるのは後世から眺めるためであろう。イタリアの自由主義者達は、間もなくファシスト内閣が倒れ、議会制民主主義が正常化すると考えていたに違いない。社会党员や共産党员は、当面の逆風が過ぎた後、再び大量の議席を獲得する気でいた

ろう。そうした楽観的な空気は、コンテ・ヴェルデ号の一等音楽室にも漂っていたと思われる。

船長が慌しく一等音楽室を出て行ってから、もう二時間は経つただろうか。船長と挨拶を交わそうとしていた人々の中にも、しびれを切らして退室する者が現れた。キャビン・デラックスの要人が急病になった、機関に障害が発生した、港湾組合がナポリ港を占拠した、いろいろな噂が出たが、結局何が起きたのか誰にも分からなかった。退室する乗客が相次ぎ、最初の頃の三分の一ほどまで人が減った。船長とダンスをできずに失望した女性がいる一方、人が減って清々の様子の女性もいた。

音楽の切れ目で、五名ほどの若い女性がオーケストラの指揮者に歩み寄った。短く切った髪を頭に撫で付け、丈の短いドレスを着た彼女達は、曲をリクエストしているようだ。指揮者がオーケストラ団員の方を向くと、団員一同が頷いた。団員達は楽譜の交換や、楽器の調整をはじめた。五分ほどの後、オーケストラの準備が整った様子であった。女性達は部屋の中央に進み出て、一・五メートルほどの間隔を置きながら横一列に並んだ。オーケストラの指揮者が両手を構えた。

いきなり、ジャズの演奏が音楽室全体に響き渡った。同時に女性達が猛烈な勢いで手足を振ってチャールストンを踊りはじめた。ジョゼフィン・ベーカーのダンス・ソヴァージュだ。周

囲の乗客達は度肝を抜かれ、オーケストラと女性達を凝視した。男性客の一人は、飲みかけていたワインを危うく吹き出しかけた。ジャズやチャールストンを知らない乗客も多いようだ。しかし四、五名の若い乗客は、演奏に合わせて腕を揺らし、やがて立ち上がって身体全体で揺り動かし始め、ついに踊りに加わった。彼らの手足は、どこかへ飛んでいくのではないかと思われるほど激しく振り動かされている。

我を取り戻した乗客達が話し始める。

「あれは一体何だ？」

「ジョゼフィン・ベーカーの踊りよ。」

「ジョゼフィン・ベーカー？」

「知らないの？ アメリカの黒人女性のダンサーよ。シャンゼリゼ劇場で人気の。よく雑誌や新聞に出てるわ。」

「あのジャズというのはどうも……」

「西欧音楽とは異なる独自の構成を持っているそうです。学者も興味を持つているとか。」

「ほう……」

「バウハウスではジャズ専門の楽団が結成された¹³。そうですよ。」

「ダンス・ソヴァージュって、難しいらしいね。」

「ジョゼフィン・ベーカーは簡単そうに踊っていたけど…」

「陰ですごい練習をしているらしい。」

「シヤンゼリゼ劇場ともあろうものが黒人など。」

「今は黒人も白人もないわ。キャッスル夫妻だって黒人オーケストラと組んでたじゃない。」

「確かにキャッスルは気品があつたが…。あのカップルのダンスはもう見られないんだな…」

「ヴァーノンも亡くなり、ジェームズ・ヨーロッパも死んでしまったわ…」

「このオーケストラもよくあんな曲を演奏できますわね。」

「あらかじめあのお嬢さん達と打ち合わせていたのではありません？ いきなりでは無理でしょう。」

「でもすごいわ。良し悪しは別として、どんなジャンルでもこなすのね。」

「あのオーケストラといい、先ほどのダイナーといい…」

「さすがコンテ・ヴェルデ号、全てが一流ですわ。」

オーケストラの演奏が終わると同時に、踊っていた女性達もポーズを決めた。いささか呆気に取られながらも、乗客達は拍手を送った。ブーイングをする者は意外にもおらず、何人かの女性はブラボーを叫んだ。

以上はフィクションであり、コンテ・ヴェルデ号の一等音楽室でジャズが演奏されたことを示す具体的な資料があるわけではない。ただし、ジョゼフィン・ベーカー (Josephine Baker 一九〇六～一九七五) は、一九二九年に実際にコンテ・ヴェルデ号に乗船している。

14

二〇世紀に入るまで古典的なワルツなどが主流であったボールルーム・ダンスは、ヴァーノン・キャッスル (Vernon Castle 一八八七～一九一八) とアイリーン・キャッスル (Irene Castle 一八九三～一九六九) の夫妻の登場で大きく変わる。キャッスル・コンビは、アングロ・サクソン人としては初めてアフリカ系団員からなるオーケストラと組んだ。ジェームズ・リース・ヨーロッパ (James Reese Europe 一八八七～一九一九) 率いるこのオーケストラは、アフリカ系アメリカ人の間で歌われていたラグタイムを全米に広めた。ラグタイムに乗って踊るキャッスル夫妻の姿は社交ダンスの世界を革新し、キャッスル・ウォークと呼ばれるステップを流行させた。アイリーンのボブ・カットもまた、新時代の女性の象徴となった。不幸にも、夫のヴァーノン・キャッスルは一九一八年に飛行機事故で死亡し、翌一九九年にはジェームズ・リース・ヨーロッパがオーケストラ団員の一人に刺殺されている。

一九二〇年台に入り、さらに新しい流れが生まれる。ジャズとチャールストンである。チャールストンをアメリカの外に広めたのは、ジョゼフィン・ベーカーであった。ブロードウェイで評判を高めた

ベーカーは、一九二五年一〇月からパリのシャンゼリゼ劇場でルヴェー・ネーグルに主演する。ダンス・ソヴァージュはこのレヴェーの中で踊られた。ベーカーのエキゾチックな魅力、チャールストンの激しい動きは、たちまちパリの観衆を虜にした。翌二六年からはフォリー・ベルジュールのショーに出演、以降はヨーロッパ全土を巡業し、一九二〇年代後半のヨーロッパをジャズとチャールストンで染めた。ベルトルト・ブレヒト (Berolt Brecht 一八九八〜一九五六) の戯曲「三文オペラ」に、クルト・ヴァイル (Kurt Julian Weill 一九〇〇〜一九五〇) がジャズの伴奏を付けたのも一九二八年のことであった。

アフリカ系住民への過酷な差別が行われていたアメリカ合衆国に比べ、パリ、ロンドン、ベルリンなどの先進的国際都市の人種差別は比較的緩やかであったとされる。このためアフリカ系芸能人であっても、パリの一流劇場の舞台に立つことができた。そうした芸能人の中で最も成功したのは、疑いもなくジョゼフィン・ベーカーであった。

しかし、パリを一步外に出ると、状況は大きく異なった。ヨーロッパツアーで最初に訪れたウィーンでは、カトリック教会や保守系議員、右翼学生などの猛烈な抗議で迎えられ、公演許可取消などの妨害を受けた。次の巡業地であるブタペストでは、学生が客席にアンモニア爆弾を投げ込んだ。ミュンヘンの警察は、風俗紊乱・公衆道徳衰退の恐れありとして公演を禁止した。オーストリア、ハン

ガリー、ユーゴスラヴィア、デンマーク、ルーマニア、チヨコスロヴァキア、ドイツなど、ベーカーの行く先々で支持者と反対者が激しく衝突した。¹⁵

一九二九年の春、ベーカーはジェノヴァからコンテ・ヴェルデ号に乗船し、ブエノスアイレスへ向かった。

アルゼンチン公演のために海を渡り、そこでもオーストリアやドイツやハンガリーと同じような論争にでくわしたとき、ジョゼフィンは唾然とし、恐怖を感じた。またしても、進歩派と保守派がジョゼフィンの公演をめぐる対立していた。またしても、ジョゼフィンは迷える魂、魔性の女、スキヤンダルの的、背徳の悪霊だった。イポリート・イリゴエン大統領は公演に反対した。ジョゼフィンのファンは舞台の幕が開く前に「イリゴエンを倒せ！」と叫んだ。ジョゼフィンはいっさい自分とは関係のないことだと思ひ、シンボルにされることには我慢がならなかった。

ブエノスアイレスからパリの新聞にあてて送った手紙は、ジョゼフィンらしくもなくいらだった調子で、もうダンスをやめるつもりだと書かれている。「白人の女性が踊ると道徳的なのに、黒人女性が踊ると罪になる」。ヨーロッパツアーにでる前、ジョゼフィンは人種差別をアメリカだけの問題だと思っていた。いまや、差別は地球規模の問題だとわかった。¹⁶

ヨーロッパにも南米にも差別は厳然として存在した。ベーカーの

全裸に近い過激な衣装が宗教的・倫理的反発を引き起こした面も確かにあった。また、ベーカー自身の生い立ちから来る自意識が、必要以上に本人の被害感情を刺激したかもしれない。しかし、この時のベーカーの体験は、彼女をレジスタンスや公民権運動へと突き動かすきっかけになった。

かつてジェームズ・ヨーロッパと組んだアイリーン・キャッスルは、一九一七年に「パトリア」という映画に出演したことがある。メキシコの革命家と日本人が共謀し、アメリカ合衆国の平和を脅かすという荒唐無稽な内容であった。「パトリア」を見た当時のウィルソン大統領 (Thomas Woodrow Wilson 一八五六〜一九二四) は、そのあまりの人種差別的 content に当惑し、対日関係悪化への懸念から修正を要請している。¹⁷ アフリカ系芸術家に理解を示したキャッスルといえども、差別と無縁ではなかった。

第一章 参考文献

- ¹ Lloud Sabaudò “The Liners Conte Rosso and Conte Verde,” Barabino and Graeve, Genova, 1922, pp.3-6
- ² The New York Times, February 19, 1922.
- ³ “The Italian Liner ‘Conte Verde’” Shipbuilding and Shipping Record, London, September 13, 1923, pp.325-335.
- ⁴ “The Propelling Machinery of the Twin-Screw Atlantic Liners ‘Conte Ross’ and ‘Conte Verde’” The Shipbuilder, September, Shipbuilder

Press, London, 1922, pp.117-127

⁵ グリフィス、デニス著、栗田亨訳「豪華客船スピード競争の物語」成山堂書店、一九九八年、一四〇ページ

⁶ Bowen, Frank C. “A Century of Atlantic Travel 1830-1930” Sampson Low, Marston, 19-- pp331

⁷ Brinin, John Malcolm “The Decoration of Ocean Liners: Rules and Exceptions” The Journal of Decorative and Propaganda Arts, Vol. 15, Transportation Theme Issue, Winter - Spring, 1990, p.42

⁸ 森田慶一「西洋建築入門」、東海大学出版社、一九八八年、一三三〜一六九ページ

⁹ エンゲルス、フリードリヒ著、石堂正倫訳「イタリヤの解放闘争とその現在の失敗の原因」マルクス・エンゲルス全集第五巻、大月書店、一九六〇年、二六九ページ

¹⁰ d’Ardenne, S, “The Green Count, and Sir Gawain and the Green Knight” The Review of English studies, issue 38, 1959, pp.113-126.

¹¹ “The Italian Liner Conte Verde” (前掲) p.332.

¹² Ducini, Prominenti “Antifascisti: Italian Fascism and the Italo-Argentine Collectivity, 1922-1945” The Americas (English edition) Vol. 51, Issue 1, 1994p.41.

¹³ ロース、フィリス著、野中邦子訳「ジヤズ・クレオパトラパリのジヨゼフィン・ベーカー」二〇世紀メモリアル、平凡社、一九九一年、二〇四ページ

¹⁴ Valerio Casali “Le Corbusier, Josephine Baker e il Music Hall”

<http://upcommons.upc.edu/revistes/bitstream/2099/2756/1/2004.38.pdf>

^f ローズ「ジヤズ・クレオパトラ」(前掲)、二〇六〜二一三ページ

¹⁵ 同二一四ページ

¹⁶ Erickson, Hal “Patria (1916)” Review Summary, The New York Times <http://movies.nytimes.com/movie/236096/Patria/overview>